

# 運動会を再興する

## — アフターコロナの行事のあり方 —

○栗原啓祥（認定こども園 清心幼稚園） 境愛一郎（共立女子大学）

### 1. 問題と目的

#### (1) コロナ禍の保育と園行事

新型コロナウイルス感染症(COVID-19)が、2020年に拡大し、本稿執筆時点においても、保育現場では対応が続いている。こうした状況の中、境ら(2021)は、登園自粛などにより、通常の実践の流れが寸断されることで「定常的な時間感覚の揺らぎ」が生じ、保育者の働き方や時間感覚の見直し、保育者の視野が広がる可能性を指摘した。実際に個別の保育者が自由研究的に保育を企画・探究する実践報告<sup>2</sup>などが見られる。また、保育の見直しや行事の意義等を再考したなどの報告<sup>3</sup>や、この機会に子ども主体の園行事に変えようという提起<sup>4</sup>もある。

園行事については、「生活の自然な流れの中で生活に変化や潤いを与え、園児が主体的に楽しく活動できるようにすること。(略)教育及び保育における価値を十分検討し、適切なものを精選し、園児の負担にならないようにする<sup>5</sup>」とある。また、地域や異年齢児と交流、食文化や伝統文化を味わう、保護者が教育及び保育や子育てに関心を持つなどの意義もある。そのなかで運動会は、歴史的・教育的観点<sup>6</sup>などの議論もされてきたが、コロナ後のあり方については、具体的な検討が不十分であると考えられる。

#### (2) 本研究の目的

著者の所属園(以下、清心幼稚園)では、コロナ禍に対応しながら柔軟に工夫して保育を探究する動きがある。2020年の運動会は中止となったが、翌年は、様々な想定を行なって再開し、新たな運動会へと変容した。そこで本稿では、清心幼稚園におけるコロナ禍の運動会に焦点をあて、何をどのように検討し、変容させていったのか、その実態を明らかにすることを目的とする。これらを踏まえてアフターコロナの行事について総合的に考察を行う。

### 2. 対象と方法

#### (1) 研究対象園について

##### ① 清心幼稚園について

清心幼稚園(前橋市)は、1895(明治28)年に創立して以来、地域と関わりながら園内外の専門家やアーティストと関わってきた歴史がある。現在は、プロジェクト型保育に分類されるような、子どもが主体的、対話的かつ継続的な探究活動を軸に実践している。

##### ② 清心幼稚園の運動会について

1825(大正14)年、1933(昭和8)年の卒業生の寄稿文に「運動会」についての記録が残っている。例年10月の月上旬に開催されており、2003(平成15)年からは運動会の名称が「清心ピック」と変わった(以下、清心ピックの名称を使用)。コロナ禍の前年、2019年の清心ピックのプログラムでは「子どもたちの姿」というページが添付されていた。各学年の保育者が、プログラムの内容

について、日常の保育との関わりを子どもの声とともに記しており、清心ピックを通じて保護者が園の保育や子ども理解に繋がっていくことを大切にしていた。

#### (2) データの収集と検討

##### ① データについて

清心幼稚園が所蔵する保育記録写真、行事の保育者記録、幸の会(保護者と園職員が構成する団体)役員会記録から清心ピックに関する事項を抽出する。また、2020年から2022年にかけての運動会に関係する保護者への配布物(通信やプログラム等)に着目する。著者自身が持つ実践記録等も上記の記録を補足する意味で対象に含める。なお、対象園の関係者とは事前に当研究発表への承諾を得た。

##### ② 検討の方法

以上のデータをもとに、清心ピックの中止から再開までの出来事を時系列に沿って整理する。その過程をもとに、どのような内容の変容があったのか、職員が検討したことや工夫したこと、実際に開催したことによる保護者の反応や保育者の振り返りについての実態をまとめ、検討する。

### 3. 結果と考察

#### (1) 清心ピックの中止と再開の経緯

##### ① 清心ピックの中止とその影響(2020年)

8月27日に開催する方向で保育者による第1回全体会議が開かれていた。しかし9月に入り、近隣地域の複数の園で休園となる状況があり、それを踏まえて、今後の行事や保育に関して幸の会役員と園とが情報交換を行った。役員からは「多様な価値を尊重することは大変だが大切」との意見があり、日常の保育を優先する対応となった。そして9月10日に、2020年の清心ピック中止を含む各種行事の中止や休止に関する通信が送信された。この時から、保護者の出入りの制限、園内での感染者確認による対応などがあり、園の中で子どもの様子や育ちを直接見る、知る機会が大幅に減少していった。

##### ② 再開するかどうかの多様な議論(2021年)

8月の幸の会役員会の記録を見ると、「実施して欲しい」「実施して大丈夫なのか」という保護者の声が園側にあり、多様な価値の尊重から「任意参加」という参加方法で、当日は親子ベースで過ごしたり動いたりする形態を検討している旨が伝えられた。保護者から「それぞれの考えがある」「任意参加はいいと思う」等の意見があった。そして「やっていただける分には協力したい」という声があり、幸の会の役割が同時に検討されていった。出入口や受付後の管理、当日の緊急対応の基準、会場内の指定席、参加者同士が会場内で安心して過ごすための工夫、モノの受け渡しをしないプログラム内の調整、幸

の会が企画するワークショップ的プログラムの打ち合わせ等、協同体制が作られていったことが分かる。

### ③ 多様な参加を促す仕組みとしてのプログラム

2021年と2022年のプログラムを見ると、「任意参加」を保障する工夫が随所に確認できた。任意参加は、清心ピックに参加するかどうかの事前表明の任意と、当日の会場で、そのプログラムに参加するかどうかを決める直前表明の任意があった。直前表明の任意は、子どもや保護者のその時の体調や気分、場の雰囲気や参加のしやすさ等、多種の要素が絡んで決定されるため、想定外の複雑さが考えられた。そこで全10個あったプログラムの特性をまとめてみたところ、次の通り分類できた(表1)。

(表1) コロナ禍以降の清心ピックのプログラム特性

分類	プログラムの特性
プロセス重視型	これまでの子どもの興味関心や育ちを意識して作られたプログラム(コロナ禍以前に扱ったプログラムに近い)
周辺並行参加型	プログラム順とは別に清心ピック時間内に並行して行なうプログラム。難易度高めに設定し、小学生以上の好奇心も誘う内容。誰もがいつでも参加可能
希望者全員参加型	赤ちゃんから祖父母まで誰もが同時に参加・体験できるプログラム(家族総出で参加できたら楽しそうと発想)
ワークショップ型	そのプログラムに参加した人たちとダンスなどを即興的につくっていく内容(保育の擬体験やライブ感の共有、お家へ帰ってから家族で続きが楽しめる趣向)
未来志向型	清心ピックをきっかけに初めて遊んだり体験したりしたことを、今後の保育に生かしていくきっかけを生む内容
保護者企画型	幸の会企画による任意参加者子ども向けプログラム。清心ピック開催前の受付時間(除菌・検温)を活用

子ども、保護者だけでなく、赤ちゃんから、小学生、祖父母まで同時参加を想定したプログラムや、周辺並行でいつでも参加できるプログラムはユニークな試みである。また、プロセス重視や未来志向のように、子どもの姿や育ちを検討した上で練られたプログラムは、以前と同様に清心ピックが教育的な意義をもつ行事としての園側の意図が感じられる。保護者が企画するプログラムはコロナ禍前も企画・実施されていたが、幸の会対象だったことから、子どもと共に楽しむ内容へと変容していたことは特徴的である。

## (2) コロナ禍の「清心ピック」開催

### ① 保護者の反応

2022年の保護者の感想の多くが好意的だった。

参加の仕方が任意ということで、うちの子はプログラムの合間に少し休んでいて、親としては参加しやすくてよかった。(略) プログラムを並行してあったので小学生の上の子も飽きずに過ごせた。(年少母)

「清心ピック」は運動会といっても違う。親としても「子どもがこういう育ちもあるんだ」と気付かされる(略) 任意に参加できるプログラムが多いので、(略) 飽きなくてそれもよかった(年長母)

いずれも任意参加を前提としたプログラムの特性が生かされていたと考えられる。当日の急な子どもの事情に対応できたり、複数のプログラムに多様に参加したりすることができるようになったことで、我が子と楽しみながら育ちを感じる機会が増えたと考えられる。また、上の子どもが十分に楽しめたことで、保護者自身がリラックスして過ごせた様子が伺える。

自分自身が楽しんじやったという印象。ただ見て、ビデオ撮ってじゃなく参加できる、その空気を子どもが感じてついてきちゃう、そういうプログラムの内容がよかった。(略) 先生やおうちの方の表情が発見できて、大事な日になると思った。事前に盛り上げていくような、訓練するというのじゃなくできるのいいと思った(年中父)

会場の雰囲気によって参加しやすさが変わりそうであ

る。おうちの方同士、保育者の様子等が伝わることで園文化が共有され育まれ、その文化の担い手として保護者自身も参加していく状況が生まれていると考えられる。

### ② 保育者の振り返り記録から

2021年に再開した際は、「(保育者自身が)動きやすい」「幸の会と情報共有とりながらできた」と好意的な記録が残っていた。プログラム内容の楽しさ、子どもと保護者で参加するスタイルも「ほんわか」してよかったと記されていた。当日に起こったハプニング対応の難しさの記録があったが、開催できたことによる達成感や前向きさの方が強い印象であった。次年度もこの新たなやり方に重ねていく方針で一致していた。

2022年の記録は、前年に比べて量、質とも大きな違いが捉えられ、前年経験の余裕さが感じられた。「準備の仕方」「会議の頻度や内容」「プログラム内容と実際、全体のバランス、前日を迎えるまでのプログラム準備」「会場の広さやつくり」「前日準備」「当日の流れ」「片付け」「子どもの姿とその後の変化」「自由記述」などの項目ごとにまとめられ、いずれも多数の記述があった。

終わってからソリを使った遊びを楽しんでいて、行事終わりでなく、行事から遊びが始まる姿があります(年中担当)

チームとしての団結や仲間と協力し合うことの面白さ、身体を思い切り動かすことの楽しさを味わうことができたと思う。子どもの方からまたやりたいと言った声があり、以前は走ることに消極的であった子も最後まで走ろうとする姿がある(年長担当)

上記の「子どもの姿とその後の変化」の記述から、清心ピック後の子どもたちの具体的な様子が伺える。コロナ禍で変わりゆく時間感覚の揺らぎも、こうして1年経過する中で保育者自身が受け入れ、新たに日常の保育と行事を行き来することを通して子どもの育ちや変化を実感し、2023年以降の清心ピックやその他の行事の意義や意味につながっていくと考えられる。

## 4. 総合考察

清心幼稚園の記録によれば、かつて太平洋戦争時には遊具から何から次々と供出され、警報下でも保育者らは園を開け続けようとしていた。今回のコロナ禍という突発的な出来事は、そうした歴史とは性質が異なるが、保育者と保護者が共通の困難に立ち向かい、主体的・協同的態度で醸成していく中で、多様な価値観を受容し、それらをつつひとつ想定していく中で責任を分かちあっていた。やがて「固定観念の溶解」が起こり「楽しむための追求」や「子どもの育ちや経験の保障」への可能性が開かれたが、「本当に大切にしたいものは何であるのか」といった軸を、保育関係者らが問いあうことがコロナ後も求められていると考える。

### 参考文献

- (1) 境愛一郎・栗原啓祥(2021) コロナ禍による登園自粛を巡る保育者の経験と意識および価値観の変遷 国際幼児教育研究
- (2) 栗原啓祥(2022) 保育者による自由研究—保育の時間性・主体性を問い直す—日本保育学会第75回大会発表
- (3) 野澤祥子・淀川裕美・中田麗子・菊岡里美・遠藤利彦・秋田喜代美(2022) 保育・幼児教育施設における新型コロナウイルス感染症に関わる対応や影響についての検討(2)—2020年度・2021年度の動向と調査結果から—東京大学大学院教育学研究科紀要(61) 331-351
- (4) 大豆生田啓友(2021) 園行事を「子ども主体」に変える! 11か園のリアルな実践記録 チャイルド本社
- (5) 内閣府・文部科学省・厚生労働省(2018) 幼保連携型認定こども園教育・保育要領解説
- (6) 箕輪潤子(2017) 戦前の幼稚園における運動会の教育的意義に関する一考察: 保育雑誌『幼児の教育』の1930年代の記事から、武蔵野教育學論集(3), 33-41